

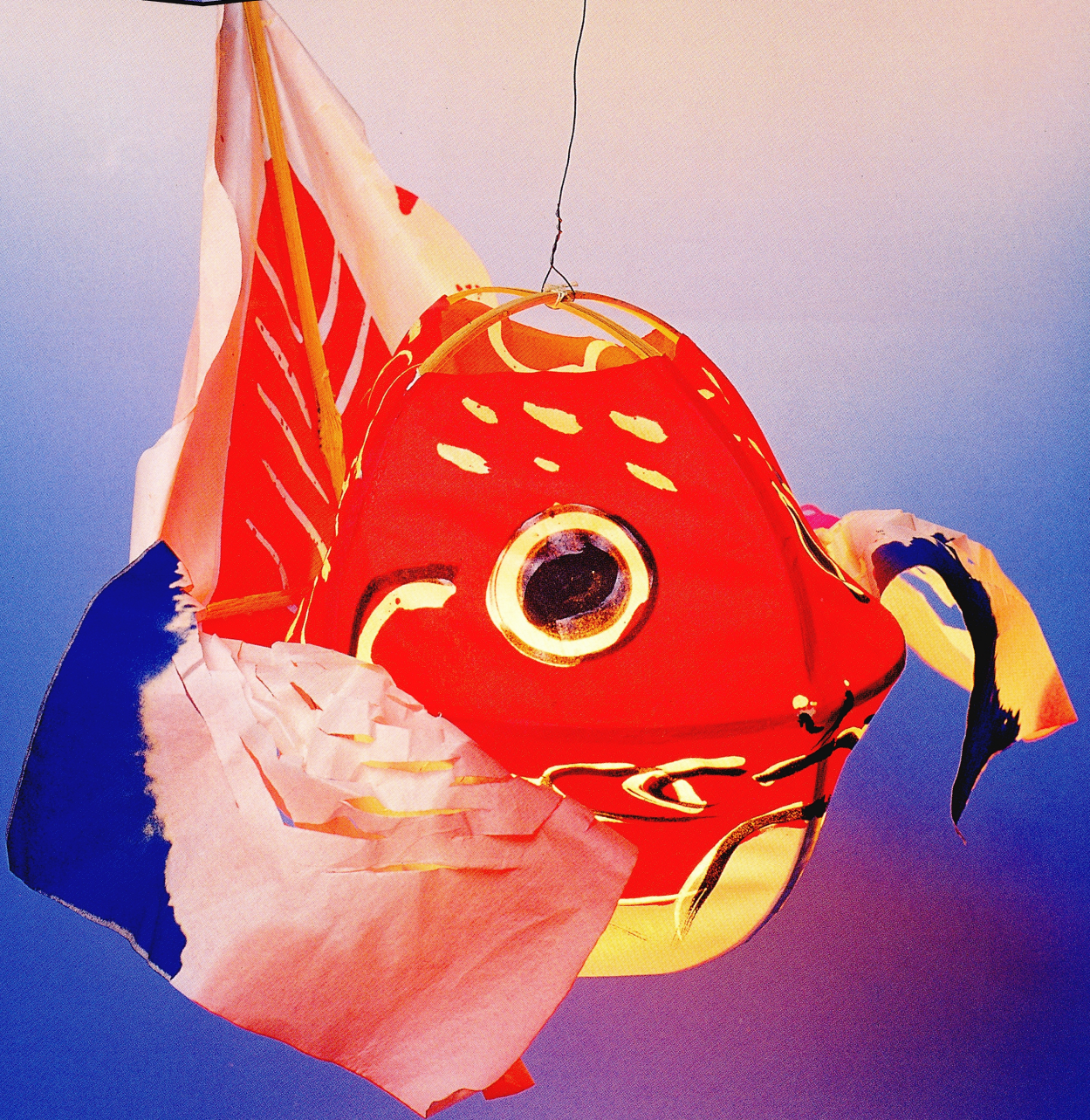
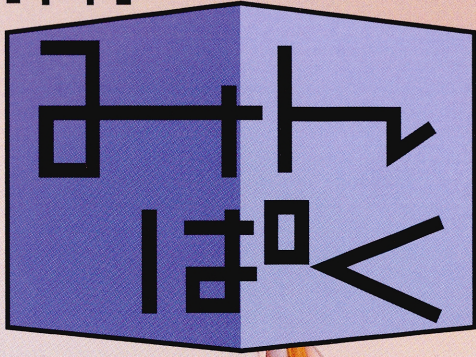
月刊

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283  
平成19年8月1日発行 第31巻第8号通巻第359号

国立民族学博物館

2007

8



地の先へ。  
知の奥へ。  
みんぼく  
30th  
Anniversary

特集

ぐれる

# 大にぎわいの秘湯にて

中野明

なかの あきら/1962年滋賀県生まれ。ノンフィクション作家。関西学院大学非常勤講師。『腕木通信—ナポレオンが見たインターネットの夜明け』(朝日新聞社)『サムライ、ITに遭う』(NTT出版)『書くためのパソコン』『バンド社会がやってくる!』(PHP研究所)、『ドラッカーが描く未来社会』(秀和システム)など著書多数。

群馬県の猿ヶ京温泉から、徒歩で三国街道の起伏を上り下り、北西にある温泉に向かった。この春のことである。同温泉は、いわゆる「秘湯」とよばれていて、その一軒宿は「日本秘湯を守る会」の会員にもなっているという。

三時間ほど歩いただろうか。ようやくその旅館に到着する。しかし、わたしの秘湯のイメージと、どこかズレがある。広々とした駐車場には、自動車の数が妙に多く、そこから家族連れ、高齢者、カップルが三々五々、宿の建物を目指して歩いていく。

もっとも、わたしは、秘湯めぐりが目的ではない。いま、江戸幕末の入浴事情について調べていて、その関係で、明治六年に営業を始めた同館に、興味をもったのだ。気をとり直して部屋に入る。

しかし、主目的の期待も、入浴前から裏切られた。係の人によると、とおされた二階部屋の本館は明治六年築ながら、主浴場は鹿鳴館様式をとり入れた明治二八年築のものだという。風呂に向かうと、確かに、脱衣場、洗い場、浴槽がひと続きになっていて、古い浴場のなごりは見られた。しかし、すでに二〇名ほどの先客でにぎわっている浴場から、幕末の残り香を感じとるのは、ちと困難な作業に思えた。

結局、これといった収穫もないまま、夕食前の小一時間、縁側の椅子に腰掛け、一人ビールを飲む。だんだん薄暗くなるにしたがって、川をはさんだ向かいの別館に、灯りが次々とともる。わたしは、夕食を運んできた仲居さんに尋ねてみた。

「すいぶん、にぎわっているようですね」

「はい。本日は満室でございます」

「明日は月曜日なのに、すごいなあ」

「ええ、このころは、秘湯ブームですから。先ごろも、当館にテレビ番組の取材がありました。そのお陰もあつて、土日、祝日は、だいたい満室です」

なるほど、秘湯ブーム、それにテレビ番組か。どおりで大盛況なわけだ。しかし、秘湯のはずが、人ばかりとは、なんとも皮肉な話である。

そもそも、本当に秘湯を守ろうと思えば、旅館の経営は自ずと厳しくなる。逆に、経営を優先させれば、人でのぎわいはするだろうが、それはもはや秘湯ではない。このジレンマは、秘湯を守ることの難しさを物語っているように思う。

翌日、事務的な、フロントのおじさんの対応に、こちらも事務的に支払いを済ませる。そして、そそくさとバスに乗り込み、平成の秘湯をあとにした。

月刊



目次

AUGUST 2007 8  
月刊みんぱく

01 エッセイ 世界へ世界から  
大にぎわいの秘湯にて  
中野明

02 特集 **ぐれる**

「ぐれる」といわない時代、  
いえない時代

吉田 憲司

祭りと若者

笹原 亮二

ブラジルのスラムの若者たち

北森 絵里

国家権力が見下ろす街で

小林 実

「ぐれ」雑感

山本 真鳥

08 モノ・グラフ  
選ばれた写真

木田 歩

10 地球ミュージアム紀行  
遺跡という名のミュージアム

川口 幸也

11 表紙モノ語り  
金魚ねぶた

丹野 正

12 みんなくインフォメーション

14 万国津々浦々  
電子的な消費生活

金子 正徳

15 時論・新論・理想論  
ゴミから革命

平井 京之介

16 外国人として生きる  
ドミニカ人選手たちの兄貴分

窪田 暁

18 地球を集める  
カレンダーから世界を読み解く

中牧 弘允

20 生きもの博物誌  
カヤツリグサでゴザ作り

小坂 康之

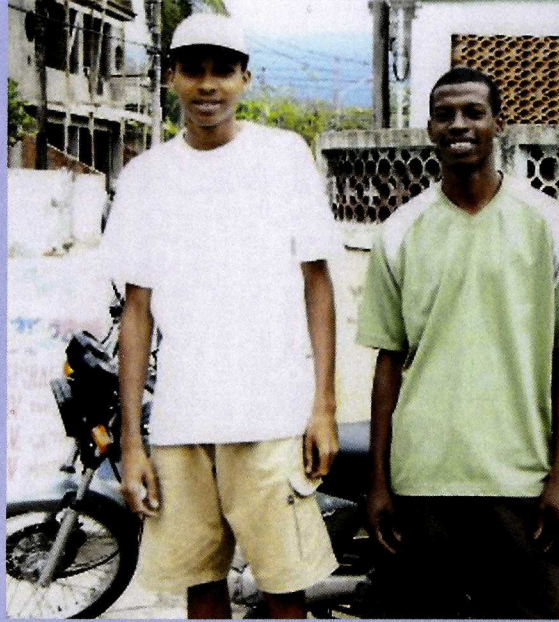
22 フィールドで考える  
月に願いを

小松 久恵

24 開館30周年記念事業のご案内

次号予告・編集後記





スラム地区の若者(ブラジル)

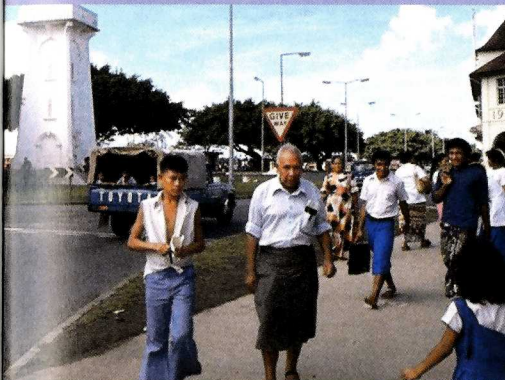
落書きされた車  
(アメリカ)



## 特集

# ぐれる

大人、組織、権威に対する青年期の反抗はいつの世にも存在するが、そのかたちは社会の在り方とともに移り変わってゆく。  
今や時代錯誤かもしれない「ぐれる」をキーワードに、若者の逸脱の意味をいくつかの社会で考える。



町を用事もないのにぶらぶらしているのは「ぐれる」過剰期の若者たち(ソマリア)

## 「ぐれる」といわない時代、いえない時代

吉田 憲司  
(よしだ けんじ)

本館文化資源研究センター

### 制度が曖昧に

今号では「ぐれる」というテーマの特集を組むという。なるほど、校内暴力、青少年犯罪、いじめ、不登校、学級崩壊、それに暴走族やシンナー・覚せい剤の使用など、子どもたちや若者たちのあいだに、看過できない問題が広がっている。その一方で、わたしたちが日常生活の会話のなかでそうした現象に言及するときも、「ぐれる」ということばを用いることはほとんどなくなつたように思われる。「ぐれる」から派生したとされる「愚連隊」ということばも、耳にしなくなつて既に久しい。「ぐれる」ということばを容易に使わ(え)なくなつた現代の日本。それは、「リストラ」や「構造改革」が進むなかで、そこから逸脱したり、反発の対象となる社会制

度自体の輪郭が曖昧になつて来ていることと無関係ではあるまい。

### 成人儀礼と学校教育のはざま

わたしが過去二〇年以上にわたつてかかわつてきた、中南部アフリカのチェワの人びとの社会では、男性と女性とで別個に営まれる成人儀礼を通じて、一人前の人間としてのたしなみが丹念に教え込まれる。その一方で、学校へ通う子どもたちは、今出て行つたかと思うと、すぐに戻つてくることしばしばである。理由を問うと、「先生の家の水汲みや新集めの手伝いをさせられるので、もう先に帰つてきた」などと言つ。子どもたちにはできない家畜や農作業の世話をさせたいと願う親たちも多く、学校教育には必ずしも熱心ではない。「ぐれる」ということばは、そこにはあてはまらない。

こうしたありさまに日々接していると、「子どもは学校へいく」という、われわれにはごくあたりまえのはずの行爲が、じつは決して「あたりまえ」でも「自然」でもなく、ある時代以降、社会が作り上げ、それを構成するものにあてはめてきた制度のひとつなのだというところを、改めて実感させられる。ミシェル・フーコーの指摘するとおり、学校、病院、監獄、動物園、博物館、そして、百科事典。これら、人間や事物を分類して整序する機構

は、一八世紀にいつせいにあらわれ、近代の社会を築きあげてきたものにほかならない。

### 声にならない声と向き合う

近代が作り出してきたさまざまな制度によつて、今の社会が支えられていることに疑いはない。その一方で、校内暴力、青少年犯罪、いじめ、不登校、学級崩壊などといった「問題行動」とされる子どもたちのおこないが、じつは、彼ら

彼女らに押しつけられた制度や組織のもつ、理不尽さや矛盾を鋭敏にいち早く感じ取つた子どもたちからの、危険信号なのだという点を見落としてはならない。しかも、その制度や組織自体が大きく揺らいでいる現代にあつては、子どもたちの悲鳴が統合され、組織化されて頭在化するまでには至らない。組織化されない悲鳴。だからこそ、大人たちには、今、子どもたちの声にならない声に、より細心に向き合うことが求められている。



チェワの人びとのあいだに見られる仮面結社への加入儀礼=成人儀礼で、長老から訓戒をうける少年。1985年8月、カリザ村、ザンビア。今、大人たちがどこまで子どもたちと向き合えるかに、子どもたちの将来はかかっている

# 祭りと若者

笹原 亮二  
(ささはら りょうじ)

本館民族文化研究部

## 正調でないカラス族

生来の小心者で「ぐれる」ことは縁遠く生きてきた(?)わたしが、「ぐれる」と聞いてまず思い浮かぶのは、各地の祭りにおいて過剰な逸脱的行為が何かと話題となる若者たちである。

例えば、青森のねぶた祭りの「カラス族」や「カラスハネト」とよばれる若者たち。ねぶた祭りでは、巨大な「組ねぶた」の巡行に笛・太鼓の囃し手と「ハネト」とよばれる踊り手が付き従う。ハネトは花笠・そろいの浴衣・襷掛けの「正装」で、「正調」の囃子に「正調」でハネるとされるが、それとは異なり、思い思いの派手な服装で勝手に巡行に加わり、だから歩きや逆行、一升瓶のもち込みなど、自由気ままに振る舞う正装・正調ではない若者たち

# ブラジルのスラムの若者たち

北森 絵里  
(きたもり えり)

天理大学准教授

## 選択肢の少ない人生

ブラジルの都市貧困地区、スラムに住む人びとの生活は厳しいが、彼らには粗末ながらも家があり電気・水道・プロパンガス、そしてテレビなど家電製品もある。一〇代の若者は働きながら学校に通い週末には友達と遊んで一見楽しそうに日々を過ごしている。しかし、彼らの祖父母も親もそして彼ら自身も、毎日早朝から夕方まで働けど働けど貧しい生活から抜けられない。彼らの心の奥底には将来に対する不安や選択肢の少ない人生に対する不満があらわれている。

五〇代以上は、学校にもろくに通えず非熟練の単純労働や肉体労働に従事し貧しい生活を送ってきたが、彼らには働いたら働いただけの成果が目に見えるかたちで

があらわれた。彼らは黒系統の特攻服や半纏の着用が多かったため、カラス族、カラスハネトとよばれるようになった。カラス族は昭和五〇年代には既にあらわれ、次第に増加し、平成一二年には一晩

四〇〇人を超えるに至った。それにともない、彼らによる祭りの妨害、傷害事件や器物損壊が社会問題化した。しかし現在は、巡行方式の変更や警備強化など、当局側の努力でほとんど姿を消したという。

青森のねぶた祭り



## 祭りのありようの変化

柳田国男は明治三九年にねぶた祭りに遭遇し、「其晩は公認された無礼講で、若い者も老人も自由な騒ぎをする」「(ネブタ流し)と記している。かつてハネトは、ハネ方の決まりも特になく、自分の感情のままに囃子に合わせればよいとされ、家々が振る舞う酒を飲みながらハネ歩いていた。現在も祭りで見られる仮装の踊り手「バケト」も、かつては額に三角の紙を貼った白装束の亡者、赤子と出刃包丁をもった安達ヶ原の鬼婆、おまるのなかに便に似せた食物を入れて食べながら歩くなど、相当過激な趣向を凝らして人気を博していた。

こうしたかつての様相は、ねぶた祭りのこの一〇〇年の大きな変化と同時に、カラス族にもそれなりの系譜があったことを示している。彼らに対する当局の措置は必要かつ全く妥当といえるが、そうした現状への対応だけで十分であろうか。

人びとの過剰さや逸脱を許容し肯定する祭りから、若者たちの許容不可能な過剰さや逸脱を生み出す祭りへ。カラス族の出現を祭りの全体的なありようの変化のあらわれとして、地域社会の歴史のなかで考えてみる必要もあるのではないだろうか。

存在した。つまり、掘った小屋だった家が素焼のレンガ造りの家になり、電気や水道が手に入り、テレビや冷蔵庫を買えるというように生活が良くなったという実感ももてた。それに比べて、一〇代の若者は、すでに家も必需品もそろっており義務教育も修了しており親の世代より恵まれているが、就くことのできる仕事はハードで給料が安く雇い主から一人の人間として尊重されないようなものしかない。彼らは、これからの人生の選択肢には、「コソコソ」と安い給料で働き続け地道になんとか生きていくという道しかなく、それが「貧しい者のあるべき姿」だということを直感的に知っている。

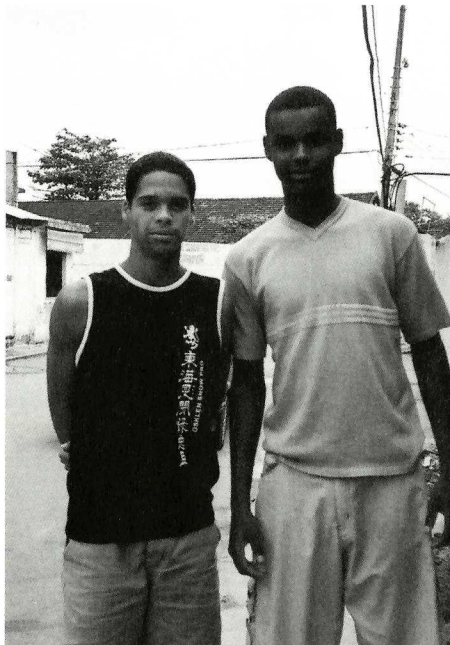
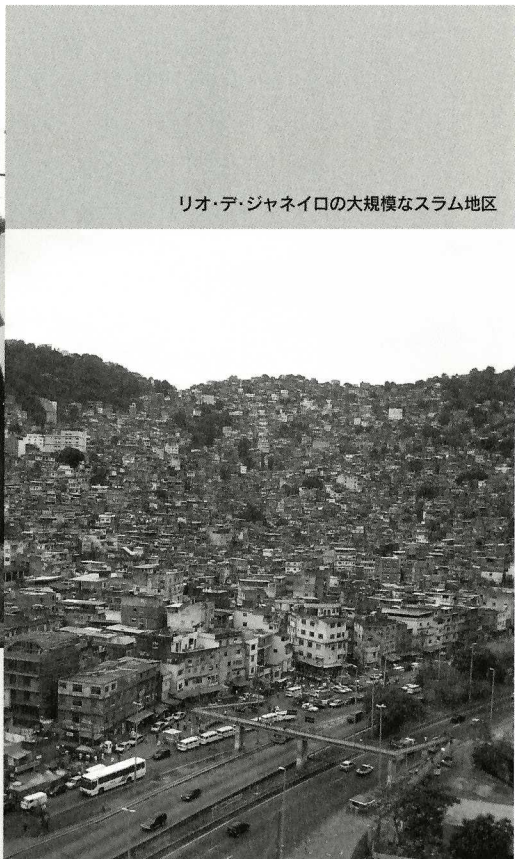
らのスカウトを目指したり、音楽やダンスの才能を伸ばしてアーティストとして活躍したりすることで、自立する。それによって自分にはできない表現の世界を築くことができる。

いずれにせよ、スラムの若者たちは、どこにでもいる大勢のなかの一人としての自分ではなく、己が生きている世界で他人より際立った唯一の人間になろうと模索している。

## 他人より際立つには

スラムの多くの若者が懸命に働き地道に生きている一方で、「貧しい者のあるべき姿」に嫌気がさしてくれた若者は、安い給料でつらい仕事に就き、失業を恐れながら働く「弱々しい自分」から抜け出したいと考える。それで無職になると、次はホームレスになって社会の底辺に落ちていることもあり、ギャングの世界に入りたがることもある。ギャングの世界に入るのには、周囲から一目置かれたいという思いが強いからだ。しかし、他の方法で一目置かれようとする若者も多くいる。たとえば、サッカーの技術を磨きプロか

リオ・デ・ジャネイロの大規模なスラム地区



手に職をつけて自立したいと語る高校生。ぐれずに生きていこうとがんばっている

特集 **ぐれる**

# 国家権力が 見下ろす街で

小林 実  
(こばやし みのる)

国文学研究資料館プロジェクト研究員

## 『罪と罰』の舞台

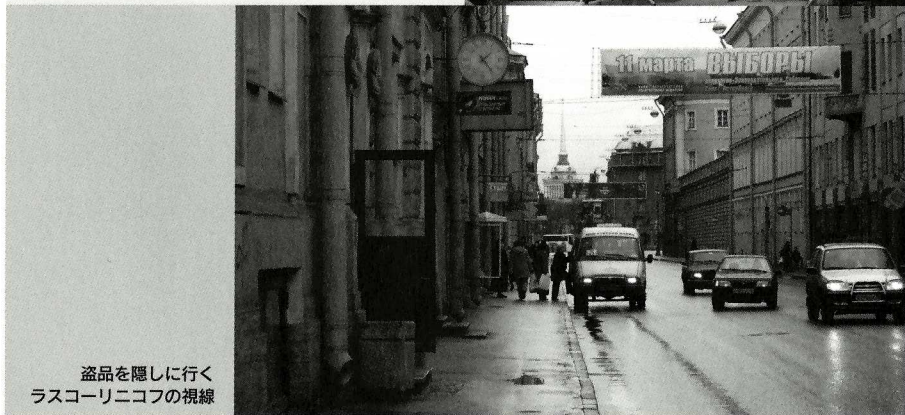
サンクト・ペテルブルグの下町を歩いた。この界隈には、ドストエフスキーの小説『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフの下宿のモデルとされる家がある。ラスコーリニコフは、大学を辞め、下宿に引きこもり、やがて非凡人には人倫を越える権利があるという考えにとり憑かれて、金貸しの老婆とその妹を殺害する。

陰険に歪んだように見える彼の思考であるが、実際にペテルブルグの街を歩いてみると、街をさまざまの視線の先には、いつもきらびやかな皇帝政府の巨大な建造物がそびえていたことに気づく。黄金の尖塔をもつ旧海軍省の建物だ。そして彼の下宿は、ちょうどそれが視界から隠れる位置に建っている。

ラスコーリニコフの下宿とされる建物



アレクサンドル2世暗殺の地に建つ「血の上教会」



盗品を隠しに行く  
ラスコーリニコフの視線

を残している。

ドストエフスキー最後の傑作『カラマゾフの兄弟』では、野性的な長兄ドミトリー、ラスコーリニコフのような理知の人である次兄イワン、そして善良なものである末弟アリョーシャが登場する。さまざまに入り組んだこの長編叙事詩の核心にあるのは、彼らの「父殺し」をめぐる、それぞれの思惑の衝突にある。「父殺し」とは、文字とおりの肉親殺しであると同時に、「神」の権威をめぐる闘争でもある。作家がついに書き上げることのなかった続編では、三兄弟のなかでもっとも信仰篤いアリョーシャが、革命党の闘士として青年たちを率いる物語が用意されていたともいえる。

## 反抗相手が強いほど

反抗は反抗する相手が強いほどに、その力を増していく。ドストエフスキーが没した一八八一年、ついに皇帝アレクサンドル二世が爆殺された。後年その現場には、通称「血の上教会」とよばれる荘厳な寺院が建立された。ラスコーリニコフの下宿がある界隈から、運河沿いに二〇分ほど歩いたところにある。

現在では、旧海軍省の尖塔も「血の上教会」も、ともに街を代表する観光スポットとして知られている。

定はできない。若者の出会う場も、ネットコミュニティなどという恐ろしくバーチャルなものだったりするのだ。若者が「ぐれ」てたむろする機会は確実に減少している。

## 「ぐれ」雑感

山本 真鳥  
(やまもと まとり)

法政大学教授

## 「ぐれる」とは

「ぐれる」の語は平安時代の遊び「貝合せ」からきているという説がある。貝の上下がぴったり合わないとき「ぐり」は「とが」ぐれは「ま」とよび、「物事が食い違うこと」「あてが外れること」を「ぐれる」というようになった。それにしても「ぐれる」とは、アナクク(時代錯誤)っぽいことばだ。肩で風を切って歩いているリ―セントのお兄さんをイメージしてしまふ。和英辞典で「ぐれる」という語を見つめる。go astray, stray from the right path (正しい道から逸れる)が並び、「ぐれた若者」として delinquent youngster (非行を働く若者)となっている。いずれにしても、「ぐれ」ているのは若者特有の現象であり、いつかこの

## さまざまな社会の若者

と。やがてもとの道に戻るはず。映画「理由なき反抗」のジムは、ラストシーンで父と和解するではないか。

「ぐれる」とは思春期の現象なのだ。急激な心身の成長を伴うこの時期には、親離れも必要。親と別個の人格を確立せねばならず、離床には痛みが伴う。マンネリ化して妥協だらけの親の生き様は見たくもない。事なかれ主義なんて糞食らえ！思春期の逸脱はどの社会にもつきものとされていたが、それに異議を唱えたのがアメリカの人類学者マーガレット・ミードである。彼女は、サモアの少女には思春期の痛みが存在しないが、それは成長や生き方を強要せず、生や死を包み隠さず子どもに見せる暮らしのためとした。しかし、あるサモア人の知識人は、サモアでは感情の表出を禁じており、そのためミードは心の葛藤を見逃したが、サモア人にも思春期の混乱はあると語った。

けれども、我々人類学者の多くは個人主義の発達していない社会で研究をおこなっており、そこで思春期の葛藤を個人の自立や成長と結びつける議論が通用するの、という疑問がある。個の確立していない社会で、個の口セスとして「ぐれる」必然性があるのだろうか。

## 「ぐれ」といふまじきの若者

「ぐれる」ためには仲間が必要だ。暴走族もバイクや車で群れるから暴走族だ。その点で、伝統的社会には年齢階梯の制度があったり、若者組があったりするとは、みんなで「ぐれる」と関係があるにちがいない。

「ぐれる」ということを最近あまり聞かないのもそうしたことと関係があるかもしれない。いまどきの日本の若者は、価値も多様化し人生のオプションもさまざまで、反発すべき標的も簡単に設

村の教会活動に参加する  
サモアの青少年。  
「ぐれ」はおくびにも出さない



特集 **ぐれる**

博物館とはモノを収集し、保存し、そして展示する場である、と当たり前のように思っていたわたしが、そもそも、モノを集めるとはどういうことなのだろうと考え込むことになったのは、あるモノとの出会いからである。

一九四九年に人類学民族学研究所の資料陳列室として誕生した南山大学人類学博物館は、調査研究の結果を公開することを目的としていたため、さまざまな調査に基づくコレクションを所蔵している。そのひとつが、二〇〇〇年に寄贈された「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」コレクションである。これは、東南アジア大陸部の山地に住むミエン（ヤオ）族やモン（ミャオ）族などといった少数民族を対象に、歴史民族的調査をおこなって集められた資料である。この調査は上智大学白鳥芳郎教授を団長に、

一九六九〜一九七四年まで三回にわたって実施された。そしてこの調査団の収集資料の一部が、標本資料として民博にも収蔵展示されていることが、最近の調査でわかってきた。

衣服や装身具を中心とした民博の所蔵資料とくらべると、人類学博物館の所蔵資料は、その量もさることながら、農具や背負い籠といった日常的な生活用品から、調査団員が撮影した映像や調査団員が作成した台帳や地図まで、非常に多岐にわたることが大きな特徴である。そのなかで興味を引いたのは、調査団員が撮影した写真である。厳密にいうと、それらのあり方である。

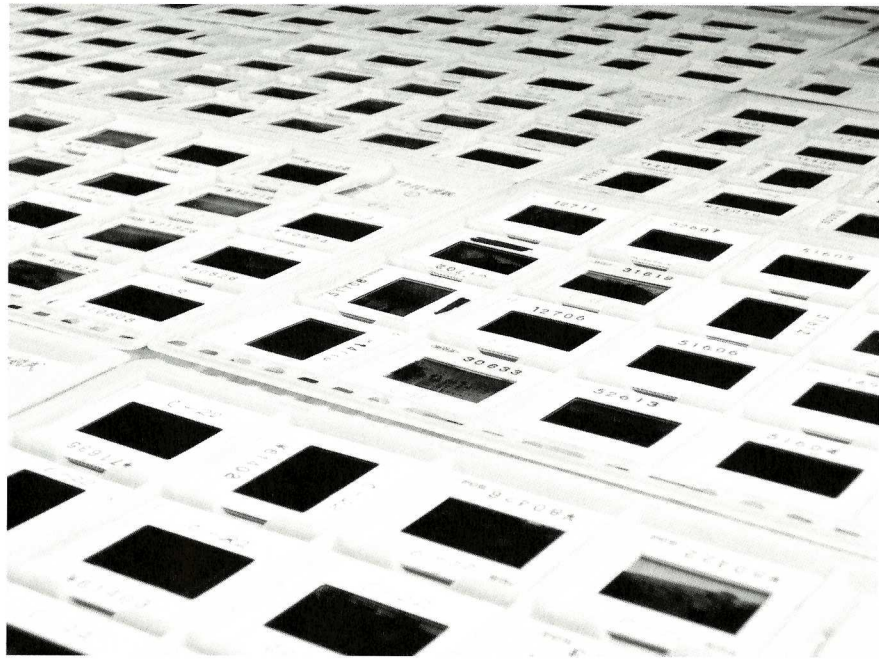
大人二人を抱えてやつと動かせる頑丈なグレーのキャビネットの、鍵付きの重たい扉を開けると、五〇枚ほどのスライドシートが等間隔の溝に綺麗にびっ

# モノグラフィ

## 選ばれた写真

木田歩（きだ あゆみ）

名古屋大学大学院人間情報学研究所



調査団員が撮影した35ミリカラースライドの一部  
南山大学人類学博物館所蔵

しり並んでいる。そのシートをとり出してみると、マウントに番号が付された、三ミリのカラースライドが行儀よく

収まっている。少し気になるのは、それらが番号順に並んでいないことである。その一枚をとり外して見ると、まるでそ

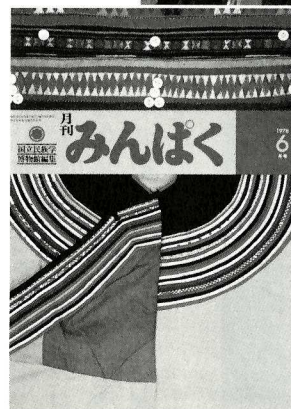
の住処すまひが決められているように、シートのコマにもマウントと同じ番号が記されている。よく見ると、シートそのものにも別の番号が与えられ、小さなラベルには、そのシートにある写真たちの内容と思われるタイトルが簡明に書かれている。こうしたキャビネットが他にも五つある。

撮影されたスライドは、このキャビネット以外にも、いくつかの種類のスライドボックスに、やはりシートに入れられて整理されているものもあれば、小さなダンボールに無造作に詰め込まれ、何があるのか判然としないものもある。数にすると、一万枚以上にもおよぶ。

調査団員が作ったスライドの台帳をめくると、撮影年月日や場所、その内容といった情報が「コマごと」に記され、番号が撮影者ごとに付けられている。ここから、フィルムがまずは撮影者ごとに分類整理され、再度、被写体の内容ごとに分類され保管されていたことがわかる。今こそ資料の組み換えは容易にできるであろうが、三〇年前となれば、途方もない時間を要する作業であったことが想像できよう。そしてキャビネットの写真たちは、大量の写真のなかから、そうした作業を経て選ばれたモノとして、調査団員が特に価値を置いたモノだったのである。こうして、撮影された写真だけでなく、それらのありようを眺めてみ



民博の東南アジアコーナーの一部として展示されている調査団の集めたモノ



『月刊みんぱく』(1978年6月号)の表紙を飾ったリス族とアカ族の女性衣服

ることで、モノを収集するとは、ただため込むことは異なる、感性や価値観といった思考のもと集められ選択されていく、文化的営みであることを改めて実感した。

写真は人類学とほぼ同時期に生まれ、その歴史を共有しているといわれるが、われわれがどのように人をとらえてきたのかを視覚的に示すモノとして、近年注目されはじめている。

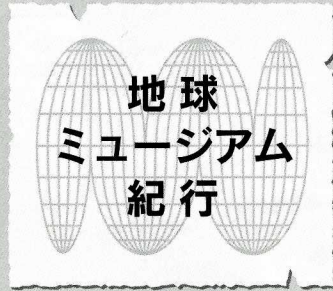
そして、記録するための、あるいはこゝとを補うためのモノとしてではなく、われわれがそれらをいかに経験してきたのかをとらえるためのモノとして写真を位置付けて見ると、けっして写真だけが重要なわけではない。どのように撮影され、どういったフィルムを使い、どういった編集作業がおこなわれたのか。こうした情報はフレームの外にあるモノとして見過ごされがちである。しかし、そうした側面にも関心を寄せることで、モノと人間のかかわり合いの複雑な様相を語ることもできるのである。

モノを収集するとは何か。それをさまざまな過去のコレクションから深く探ってみることは、膨大な量の情報が溢れ、記録媒体の軽量化が進み、手軽に編集することができている現在に生きるわれわれにとってこそ、意味があるのではないだろうか。

# 遺跡という名のミュージアム

川口 幸也 (かわぐち ゆきや)

本館文化資源研究センター



寺院・廟墓・史跡／インド

わたしが思いやっていたのは、プームのなかで全国各地につくられた日本の博物館、美術館のことである。洒落た外観の、しかしせいせい五〇年も経てば建て替えられるであろう建物のなかに、急ごしらえで集められた文化財や美術品の数々。それらはたしかにありがたいのだが、一方で、ただ見に行くだけでは不十分で、何かを学ばなければならぬ、などといわれたら、気が重くなって二の足を踏むのが人情というものだろう。

散歩ついでに、ただ行って帰るだけという、もっと

インドのおもだった都市には、どこも立派な博物館、美術館がある。

たとえば、首都ニューデリーには国立の博物館、近代美術館、それに工芸美術館、またガンジーやネルーの記念館をはじめ、大小さまざまな博物館や記念館があり、それぞれの展示内容は、一定以上の高いレベルを誇っている。けれども、インドの都市には、そうしたミュージアム以外に、いたるところにヒンズー教、イスラム教の古い寺院やかつての王の廟墓<sup>びやうぼ</sup>、あるいは史跡がある。これもニューデリーの例を挙げれば、いずれも有名なジャーマ・マスジッド、クトゥブ・ミナール、フマユン廟、レッド・フォートをはじめ、市内のあちこちに、見るからに由緒ありげで、歴史の風雪をしのばせる遺跡が散在している。そして、それらはどれも、散歩やハイキング、クリケット、はたまたデートを楽しむ若い恋人たちや家族連れに親しまれている。

おそらく、彼らは、日々の暮らしのなかでくつろぎや安らぎを求めて、何度もそうした遺跡を訪ねているに違いない。単なる癒しが目的であっても、繰り返し足を運ぶことで、いつしかごく自然に、そこに堆積している歴史のオーラに触れているのではないかと。むしろ、やり詰め込んだ知識とは違って、そうした経験は一生忘れることがないだろう。

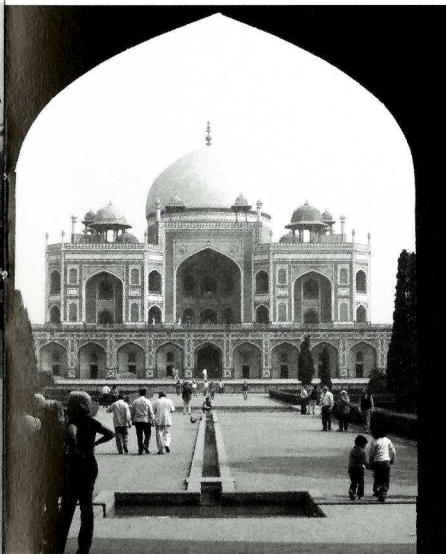
いしかえると、街なかにあるこれらの寺院や遺跡は、ミュージアムとこそ名乗っていないが、事実上のミュージアムとしての役割を果たしているのだ。むしろインドの風景のなかになじみ、人びとの日々の生活に溶け込んでいて、妙なお仕着せ臭さがない分だけ、いわゆる博物館、美術館よりもはるかに効果的にその機能を果たしている面があるかもしれない。

敷居の低いミュージアムのあり方もあっていいのではないか。

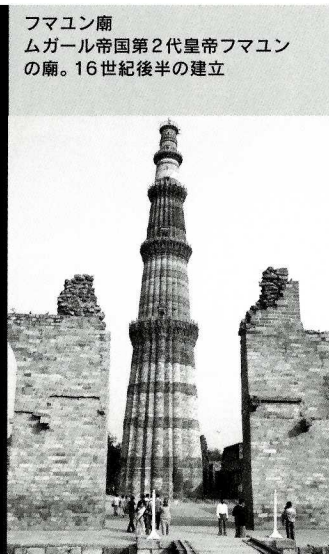
それにしても、目覚ましい発展ぶりが伝えられるインド経済。この先、経済成長を成し遂げたインドにも、かつての日本と同じようにミュージアム・プームというのがやってくるのだろうか。そのとき人びとはどんな反応を見せるのだろうか。少々気になるころである。



ジャンタル・マンタル  
18世紀前半に造られた天文台



フマユン廟  
ムガル帝国第2代皇帝フマユンの廟。16世紀後半の建立



国立近代美術館

クトゥブ・ミナール  
イスラム勢力によるインド支配を象徴する塔。  
13世紀に造営が始まり、15世紀後半に完成した

## 金魚ねぶた

祭礼(ねぶた)用金魚ねぶた(標本番号H36215、高さ/19cm 幅/27cm 奥行/32cm)

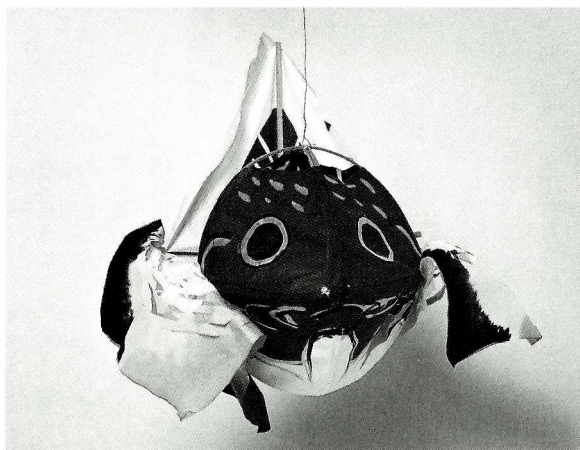
## 丹野 正 (たんの ただし)

弘前大学教授

八月初旬の青森県津軽地方では、青森市の大型組ねぶた、弘前市の扇ねぶた、五所川原市の巨大な立ちねぶたなどが宵闇よいやみのなかに華やかな姿をあらわし、浴衣や法被姿はっぴの群集と囃し手とともに街なかを練って行く。

表紙の金魚ねぶたは、このねぶた祭りに彩りを添える脇役である。祭りが近づくと駅のホームや商店街には多数の金魚ねぶたが吊り下げられ、ムードを盛り上げる。青森駅では改札口近くのホームに巨大な金魚ねぶたを飾り、観光客を迎える。むかしはこうした大きな金魚ねぶたが、さまざまな姿かたちの組ねぶたのひとつとして作られていたという。弘前では現在も、主役の扇ねぶたの前方を進む「前ねぶた」として、この種の金魚ねぶたが登場することもある。

また祭りの夜には、表紙のタイプの金魚ね



ぶたを棒の先に吊るし、なかに小口ウソクや豆電球を灯してもち歩く人もいる。行列のなかの子どもがこれを手にはしていると、沿道の観客から「メンコイ」「かわいい」と拍手がおこる。

さらに、小型の金魚ねぶたもある。浴衣姿の参加者は豆絞りの鉢巻にこれをかんざしのように挿している。子どもや女性にはよく似合う。行列中のわたしたちもこれを数本挿して歩き、観客のなかの幼児にそれらをあげるのである。

弘前では数年前まで、毎年五月になると金魚売りのお爺さんが天秤棒あまのぼうを担いで街なかを例の売り声をあげながら歩いてきた。城下町弘前と、その近郊には鯉や金魚が泳ぐ池と庭木を配した家が多い。こうした土地柄が金魚ねぶたの由来に関連しているのであろう。





## 電子的な消費生活

金子 正徳

(かねこ まさのり)

本館機関研究員

### 電子決済のビジネス

わたしは二〇〇〇年ごろにインドネシア共和国ランブロン州で長期調査をしていた。胡椒やコーヒーの一大産地である同州ではそのころ、ケータイ(携帯電話)の通話可能地域が州都近辺に限られていたこともあって、高価なケータイを使っている人はまだめずらしかった。しかし、二〇〇五年に再訪したときには大きな変化が見られた。スマトラ島の南端に位置するこの州でもすでに購入しやすい価格帯の中古が数多く売られ、大学生はもちろん、高校生のあいだでもケータイを使っている様子を日常的に見かけるようになっていた。初対面の相手とまずケータイの番号を交換することも当たり前である。さらにいえば、内陸に位置している遠隔地域では、インフラ整備が困難な有線電話よりもケータイのほうが普及しつつある。電波が届きづらい地域では個人でアンテナを立てていることもある。

手軽なプリペイド式が主流であることも、インドネシアでの急速な拡大に繋がっている。その通話度数は、プリペイドカード購入や銀行ATM経由の支払いなどさまざまな方法で追加できる。しかしある店舗で、プリペイドカードがあるいは電子決済かと聞かれたときには驚いた。それまでの経験からこのランブロンで、ショッピングモールでのクレジットカード払い以外に何かを電子決済すると思っ

いなかったのだ。

その売買の仕組みを聞くと、電子決済とは売り手にとつての決済だった。売り手がケータイのショートメッセージサービス(SMS)という文字制限付き電子メールで、買い手のケータイへ通話度数を追加するよう注文をいれ、代金は売り手のネット口座から引き落とされる。最終的に買い手は、売り手が提示した額を現金で支払う。それは同じ度数のプリペイドカードを買うより安価だが、口座から引き落とされた額よりは高い。つまり、代行手数料を稼ぐビジネスである。

### ケータイでSMS

こうしてケータイを用いた小商いを生み出してしまふ人は一部の商人だけなのだろうが、インドネシアそしてランブロンの人びとの生活のさまざまな場面に、ケータイのSMSを媒介とした電子的な消費生活は徐々に浸透している。テレビ番組連動イベント、映画上映情報、音楽CDの曲情報、販売促進のためにおこなっている懸賞への応募など、さまざまなSMS番号が商品包装・新聞雑誌広告・テレビ画面のなかにうるさいほど記され、電子的なサービスを消費するように促している。ケータイは通話やメールのためだけでなく、SMSを介して情報端末としても使われている。通話度数は減りゆくばかりである。

こんな状況を見ると、田舎の彼女に通話度数をプレゼントしろとたびたび言われてしよけていた首都の安宿の従業員が、ケータイにはまる村落の若者たちの将来の姿と重なるように思われる。



州都にあるショッピングモールのケータイ売り場

(写真はいずれもイドリス氏提供)

時	論
新	論
理	想 論

# ゴミから革命

平井 京之介

(ひらい きょうのすけ)

本館民族文化研究部

## 成功した水俣方式

「ゴミとは人間が利用したあとの不要物、いわばカスのことだ。たんなる「役に立たないもの」ではなく、人間が出すのである。同じものでもどう利用するかは人によってちがうから、出す「ゴミ」も人によってちがう。一人一人が確実に使う分だけ手に入れ、最後まで使い切り、それでも残る容器などをリサイクルしていれば、「ゴミ」は出なくてすむ。

こんな当たり前のことを真剣に考えるようになったのは、熊本県水俣市にある市民団体が半年ほど寄宿した経験がきっかけになっている。環境モデル都市の実現にとり組む水俣市は、水俣病の教訓を活かして環境に負荷の少ない暮らし方の促進を目指している。さまざまな施策のなかでも「ゴミの減量化は成功例として知られており、全国各地から行政担当者や修学旅行生がひっきりなしに視察に訪れる。

水俣方式は徹底していて、現在では二種類に分別している。「ビン」はそのまま再利用可能な「生きビン」と、その他の「雑ビン」に大きく分けられるが、雑ビンはさらに色によって透明、水色、茶、緑、黒の五種類にわけられる。廃プラや缶、ビンは洗ってから捨てるのだが、水俣市民はプラスチック製の弁当がらさ洗剤を付けたスポンジできれいに洗ってから捨てていた。



分別には迷うものも少なくない。表示がなくて、アルミ缶かスチール缶かわからない。シーチキンのは埋め立てゴミだとしおりに書いてあるが、イwish缶はどうだろう。硬いプラスチックは燃えるゴミだというのが、どれくらい硬いと「硬いプラスチック」なのか。レトルトカレーの袋はなかまで洗えないが燃やす「ゴミ」か、

それとも埋め立て「ゴミ」か。

## 資本主義に対抗

悩むうちにいろいろ考えるようになってきた。捨てるときに迷うもの、カスが出そうなものは買わない。容器に材質表示がないものは避ける。なるべく形状が洗いやすいものを買う。頻繁に飲むなら紅茶よりコーヒード。ティーバッグだと、ホチキスははずして埋め立て、バッグは燃やす「ゴミ」、中身は生「ゴミ」という分別の手間がかかる。使う量はどれくらいか、カスが出るかどうかをよく考えてからものを買うようになった。生活スタイルの再点検である。

ドンドン作ってジャンジャン壊すのが資本主義の思想である。資本家は宣伝広告を通して次から次へとあまり必要でもない製品を買わせようとする。我々は深く考えもせず、彼らにすり込まれた生活を追い求めて製品を買い、ろくに使いもせずに捨てる。これで資本主義は発展する。だとすると、我々が立ち止まって自らの環境を見つめなおし、身の丈にあった生活を自ら組織していくことは、資本主義支配に対する闘争となるのではないか。

ベルリンの壁崩壊以降、社会主義者は右往左往しつつ方向性を見失っている。今こそわたしが示そう。二一世紀の革命は「ゴミの分別」によって達成されるのだ！

# 外国人として生きる

## ドミニカ人選手たちの兄貴分

窪田 暁 (くぼた さとる)

総合研究大学院大学文化科学研究科

### 裏方助っ人として

「危ないぞー! ルイス。」ノックバットをもったコーチから声が飛ぶ。名前を呼ばれた選手は、目の前に転がっているボールを拾い上げると俊敏な動作で防球ネットの後ろに身を隠した。フランス・ルイスさん(三〇才)、名古屋に本拠地を置く、プロ野球球団・中日ドラゴンズのブルペン捕手兼通訳というの彼の肩書きである。名古屋ドームで試合のある日は、正午過ぎには球場に入る。チーム練習が始まると、選手のキャッチボール相手、ノックの球拾い、そしてコーチと選手間の通訳など、息をつく間もない忙しさだ。試合が始まると、ブルペンに移動し、中継ぎ投手であるドミニカ人二人の側を離れない。試合が終わって帰宅し、遅い夕食を済ますと、「疲れて、すぐに寝てしまふ」というハードな毎日だ。

### 世界への入口

カリブ海に浮かぶ小さな島国、ドミニカ共和国はアメリカのメジャーリーグ・ベースボールに多くの大リーガーを送り出す国として知られている。安価で優秀な才能を見逃さない大リーグ全球団がそれぞれ、ドミニカ国内に選手発掘養成施設としてベースボール・アカデミーを設けている。そこからは、ホームランバッターとして有名になったサミー・ソーサ選手やペドロ・マルティネス投手など毎年多くの大リー

ガーが誕生している。

ルイスさんはドミニカの地方都市、エル・セイボ出身。周りの子どもたちと同様に物心のついたころから空き地で野球をして遊んだ。三才になると、近所の球場でやっている野球教室に入り本格的に野球の練習を開始する。ちなみにこの野球教室は、ドミニカ全ての町にあり、アカデミーを目指す少年たちは、学校が終わると靴をグロブにもち替えて球場にやってくる。授業料は無料で、誰もが練習に参加できるのも特徴だ。

一八才のとき、広島カーブ・アカデミーでコーチをしていた同郷の大先輩へロニモ氏(元大リーガー)がルイスさんのプレーに興味をもち、入団テストの結果二〇〇ドルで契約。当時のアカデミーには、広島カーブを経由し、現在も大リーグで活躍中のアルフォンソ・ソリアーノ選手やティモ・ペレス選手が在籍し、アカデミー対抗戦で常に優勝争いに顔を出す黄金期にあった。ルイスさんも彼らとともに主軸打者であったと言った。だから、その才能は計り知れない。一八才のルイスさんにとって、世界への扉が大きく開かれた筈だった。

二一才のとき、ルイスさんに待ちに待った日本行きのチャンスが訪れる。ところが、その内容に耳を疑った。選手としてではなく、ブルペン捕手として、日本の野球を勉強して来なさいとのこと。曰くから、アカデミーの日本人職員の許へ積極的に日本語を教わりに行く真面目な性格が皮肉にも災いした。悩んだ末、「とりあえず一年間、日本で

やってみよう。もしプレーを続けたければ、ドミニカに帰って他のアカデミーを受けたらいい」と決断したのは、子どもころから、父親がアメリカへ出稼ぎに行く姿を見て育ち、いつか外国で働いてみたいと思いつけてきたことによる。

### ドミニカ人選手を支える

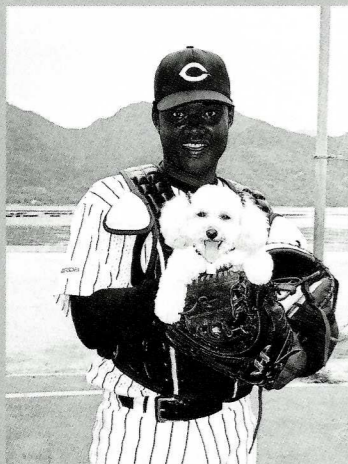
日本に来て驚いたのは、「上下関係に厳しいタテ社会の習慣。プロ野球の世界は、国内でも特に体育会系の厳しい社会だから、ドミニカのフランクな人間関係に慣れていたルイスさんが戸惑ったのは無理もない。しかし、真面目な彼は、オーナーに日本語学校に通わせてもらえるよう直訴。日本語を必死に勉強して、敬語を巧みに操りチームメイトに溶け込んでいった。いつしか、選手になるという夢も思い出さなくなるくらいに、日本での生活に夢中になっていく。一軍の遠征に同行して、東京や名古屋などの大都市を訪れることもできた。収入もドミニカでは考えられないような金額が手に入る。気がつけば日本滞在は一〇年になり、今では日本にやってくる同郷出身選手たちの相談相手として頼られる立場になっていた。こういった経歴を買われて、今年の二月に、中日ドラゴンズから引き抜きを受けることになり、四人のドミニカ人選手を裏で支えることが仕事になった。まさに、ルイスさんの天職ともいえるべき仕事である。ゲームの無い日には、後輩たちを家に招き、ドミニカ

料理の腕を振るう。「初めて日本に来て困ったのが料理とことばだったから」と自分の経験から選手たちの悩みや苦労は、手にとるようにわかっている。後輩たちにとっては頼もしい兄貴分である。

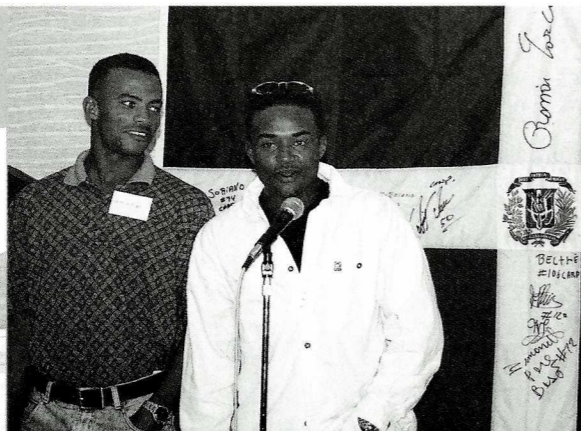
一年契約の厳しいプロの世界に生きて来たルイスさん。異文化で生活するうえでの苦労や不安もあったらうと想像する。しかし「真面目に頑張っていたら、絶対に大丈夫だから」と話す口ぶりからは、絶対に日本で成功してやるといった特別な気負いは感じられない。それは、大好きな野球の仕事に就けたことや、何事も「とにかくやってみよう」という生来の資質によるところが大きいように思われる。今年五月には、五年前に結婚しながら、教師の仕事のためにドミニカに残してきた奥さんが来日、忙しい毎日にも張り合ってきた。将来のことはまだわからないが、「ドミニカに帰って、日本で覚えた野球を教えた」との夢をもっている。

一〇年ほど前から、日本のプロ野球にやってくる外国人選手の出身地に、アメリカ以外の国が目立つようになってきた。特に、ドミニカ、ベネズエラ、パナマといったカリブ海周辺地域の出身者が多くなっている。こういった選手たちは、日本の習慣に戸惑い、日常生活でストレスを抱えこむことが多いという。彼らがプレーに集中するために、彼らと日本を繋ぐルイスさんのような存在が、ますます必要とされているのは確かである。自分のあいだ、ルイスさんの「故郷への夢」はお預けになりそだ。

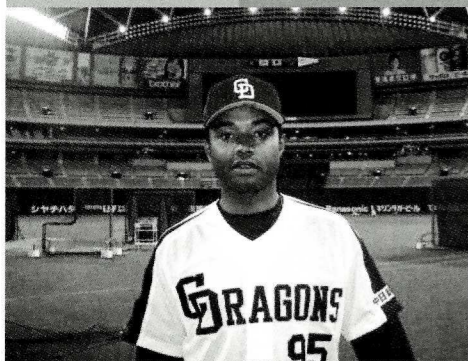
広島カーブのドミニカ人選手を励ます集いでスピーチ



ファンとの交流も  
いい思い出。  
広島カーブ時代

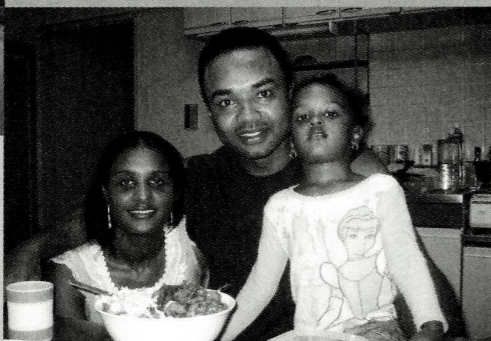


同僚のドミニカ選手  
たちと焼肉店で。  
広島カーブ時代



今年から中日ドラゴンズの  
ユニフォームに袖をとおす

休日には家族で  
ドミニカ料理の夕食を囲む。  
名古屋市内の自宅で



1945年のフランス・カレンダー。  
連合軍がパリ市民に食糧を配っている絵を見ると、  
国旗の大きさ＝星条旗、ユニオンジャック、  
三色旗の順で、当時の勢力図がわかる  
(標本番号H225329)



日系ブラジル人向けのカレンダー。  
日本とブラジルの地図がならぶのは  
日伯友好のみではなく、ブラジルの  
大人が日本の、その子どもたちが  
ブラジルの地理を知るためである



標本資料目録データベース  
[www.minpaku.ac.jp/menu/database.html](http://www.minpaku.ac.jp/menu/database.html)

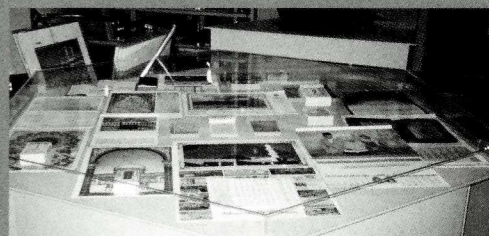
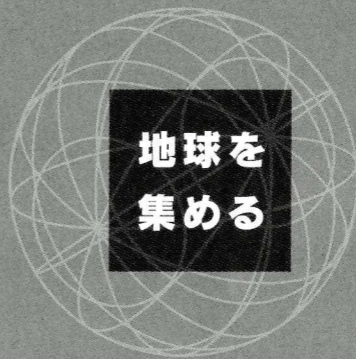
民博収蔵庫におさめられている  
カレンダーの一部



## カレンダーから世界を読み解く

中牧 弘允 (なかもき ひろちか)

本館民族文化研究部



1999年度の特別展  
「越境する民族文化」の  
カレンダー展示

### ゆたかな文化の表象

ここ一五年ほど、わたしはカレンダーの収集にはげんでいる。純粋な趣味というわけではなく、さりとて民博の業務命令というわけでもない。しかし、ある意味では趣味と実益を兼ねて、みずから楽しみながら民博資料としての充実をはかっている。

わたしにとってカレンダーの魅力は何かと問われれば、そこにさまざまな暦法が記載されているだけでなく、多様な文化が表象されているからだと答えることができる。生粋の太陰暦で断食月をまもるイスラーム暦。天地創造や神武天皇即位を聖書や記紀で計算して紀元をさだめているユダヤ暦や皇紀。春分の日を元日とする太陽暦のイラン暦。星宿に太陽がやどる期間をひと月とするインドやネパールの暦。グレゴリオ暦(西暦)が標準化しグローバル化するなかで、伝来の暦法もそれなりに存在感をもち続けている。新年を比較するだけでも、日本が西暦の正月を盛大に祝うめずらしい国であることがわかる。なぜなら中国や韓国では旧正月のほうが重要だし、欧米ではクリスマスが比重が正月よりもはるかに高い。イスラーム暦の正月は約一日ずつ毎年繰り上がるし、ユダヤ暦やエチオピア暦の元日は九月か一〇月である。インドでは四月中旬に新年がめぐっている。暦法と行事に関する記述は民俗学や民族学の格好のテーマとなってきた。歴史学

にとっても暦法はイロハである。旧暦を知らずして日本史は語れない。俳句にも季節があるため暦の知識が欠かせない。日和見や日読み(よみの)の語源とされる、つまり日にちと吉凶の判断が暦にもとづいてなされることも行動指針として重視されてきた。しかし、カレンダーや日めくりには暦が印刷されているだけではない。美しい風景や美男・美女の写真、聖人像や指導者の肖像、聖句や格言、それに企業広告や行政広報、地図や電話番号など多種多様な情報がのついている。これもあわせて研究する価値があるのではないか。そこには宗教文化、国民文化、大衆文化、企業文化、観光文化、民族文化、民俗文化など数え上げたらきりがないほど、ゆたかな文化が表象されているのではないかならば、カレンダーや日めくりが付随している情報までも含めて研究することが大切ではないか。

### 「考暦学」といつ

そうした学問をわたしは「考暦学」と名付けてみた。暦学ではなく、暦を考える学である。考古学からの発想であるが、一九九三年二月の「みんぱくセミナー」ではじめて提唱し、以来、曲がりなりにも実践してきた。当時、民博の暦関連資料は約四〇〇点、国にして約一〇カ国にすぎなかった。それが二〇〇〇年の時点で約二二〇〇点にのぼり、国別ではおよそ七〇カ国にお

よんだ。

考暦学の基礎は収集にある。集めなければ話にならない。わたしは民博のネットワークをフルに活用して収集にのりだした。同僚はもとより、客員教授、外来研究員、大学院生などに依頼し、世界各地のカレンダーの入手を心がけた。拍車がかかったのは特別展「越境する民族文化」(一九九九年九月〜二〇〇〇年一月)である。その一部として、西暦二〇〇〇年のターニングポイントをはさんでカレンダーの展示を企画した。グレゴリオ暦のグローバル化と、それに対抗するかのようにならざるを得ないイスラーム暦を筆頭とする勢力との相克を、カレンダーで表現しようとしたのである。さらに、グレゴリオ暦に打ち勝てなかったフランス革命暦なども動員して、約六〇〇点の新旧カレンダーをこころ狭しとらべてみた。あわせて展示資料や各種の暦法が検索でき、暦変換プログラムも操作できるコンピュータの端末を配置したのである。

こうしたころみはその後も収集や研究に引き継がれた。そのひとつは筆者を代表者とする科学研究費補助金による「マルチカレンダー文化の研究—日本を中心に—」(二〇〇四年度〜二〇〇五年度)である。ここでは国内のエスニック・マイノリティーが使用するカレンダーがひとつの柱となり、在日韓国人、在日中国人はもとより、在日フィリピン人や在日ブラジル人向けの興味深いカレンダーが多数収集された。また

サンフランシスコやサンパウロのエスニック・カレンダーも現地の人たちの協力をえて結構集めることができた。また十分整理しきれないが、二〇〇〇年以降の収集点数は五〇〇をくだらないはずである。

### 流れ去る時の救済

現在、民博収蔵のカレンダーはホームページ上で閲覧することができる。目下、さらに詳しいデータも準備中なので、ほどなく公開されることであろう。民博のカレンダーにアクセスすることによって世界各地の文化に親しみをもつてふれていただくことができれば、作成者としてはこれ以上のよろこびはない。カレンダーは他国の多様な文化や自国の意外な文化を知る窓口として、知的にたのしいのである。切手やコインにもそうした側面があるが、それはもっぱら国民文化の範囲にとどまる。国家がお墨付きをあたえた文化に限られるのである。それにくらべ、カレンダーや日めくりの類は先に列記したような重層的な文化の発信源となっている。中身の濃さと深さがちがうのである。しかも切手やコインのような市場がないから、交換価値は無きに等しい。無一文で使い捨てられ消えゆく運命にあるカレンダーの命をつなぎとめることは崇高な営為であるかもしれない。なぜなら、流れ去った時を救済することにつながるからである。しかも、雑多な情報と一緒に。

# 生きもの 博物誌

## 【カヤツリグサ】 ラオス



### カヤツリグサで ゴザ作り

小坂 康之  
(こさか やすゆき)

京都大学東南アジア研究所非常勤研究員

#### ゴザで接客

ラオスの農村で家々を訪問すると、ほぼ決まったかたちのもてなしを受ける。まず床にゴザを敷いてくれる。それから、おもむろに歓迎の杯が差し出される。このとき、日中ならば、高床式家屋の床下でくつろぎながら、強い陽差しをやり過ごす。夕方以降は、狭くて急な階段をおさるおそる上がって、家のなかにお邪魔することになるだろう。床下でも家のなかでも、ふだんは折りたたまれていたゴザが、訪問客のために上座を創り出す。

ゴザを使う習慣は、ラオスに限らず世界中に広く見られ、その用途もさまざまである。床の敷物としての利用はもちろん、部屋の仕切り、家の屋根、ポトや荷車の覆い、また戸外で農作物を乾燥させると

きに用いられることもある。さらにアマゾンやボルネオのロングハウスでは、床に敷いた一枚のゴザが個人の空間をはっきりさせる手段のひとつになるという。

#### 厄介物を逆利用

ゴザの材料には、丈夫でしなやかな特性をもつ、植物由来の多様な素材が使われている。例えばラオスでは、カヤツリグサの仲間、クスウコンの仲間、パンダナスの葉、カジノキの樹皮を用いて、さまざまなタイプのゴザが作られている。これらのなかで、もっとも主要な材料とされる、カヤツリグサの仲間を用いたゴザ作りを見てみよう。

カヤツリグサの仲間は、どこにでも生えている「厄介



川沿いの低地に自生する  
プー・ナー(乾季の様子)

庭先の池に植栽されるプー・イトック



プー・イトックの植栽用の根茎

カヤツリグサの茎を1本ずつ、添木を使って  
縦糸のあいだをとおしていく



ゴザ織り専用の道具が用いられる



#### カヤツリグサ

カヤツリグサ科の植物は世界中の熱帯から温帯にかけて分布し、約50属4000種が知られている。「カヤツリグサ」の名前は、その三角形の茎を裂いて、ちょうど蚊帳を吊ったようなかたちの四角い骨組みを作る「蚊帳吊り草遊び」に由来するという。大きい種類では高さ2メートルにも達し、真っ直ぐで節のない茎は、ゴザやむしろの材料のほか、かごや菅笠(すげがさ)を編むためにも用いられてきた。写真は、プー・モーの果序。学名: *Actinoscirpus grossus* (L.f.) Goetgh.&D.A.Simpson



な雑草だ。村のまわりの林地や畑地、水田、水辺に、それぞれ異なる種が生育しているが、どれもよく似た容姿をしている。しかし、ほんやりしていると気付かない各種の特性を、村の人たちはよく知っている。ゴザの材料として一般的に使われるのは、プー・ナー、プー・モー、プー・イトックの三種類である。プー・ナーとプー・モーは、水辺に自生する。プー・ナーは川沿いの低地に見られ、もっとも大きくて一・五メートルほどである。プー・モーは深い沼に群生し、二メートルちかくまで育つこともある。これら二種類のカヤツリグサは、乾季初めに稲刈りを終えたあと、水位が下がってから刈りとられる。一方でプー・イトックは、庭先の池に植栽される。一・五メートルほどに伸びる真っ直ぐな茎は、雨季と乾季に一回ずつ収穫される。

刈られたカヤツリグサの茎は、陽にあてていったん乾燥させる。そしてゴザを織る前に、数分のあいだ水に浸して柔らかくする。模様を織り込むために青や赤の染料で染めることもある。ゴザの織り方は、基本的に機織りの原理と同じだ。縦糸として細い紐を張り、横糸としてカヤツリグサの茎を一本ずつとおす。慣れた人ならば、一日に二メートルも織りすすむという。

農民にとって、カヤツリグサのような丈夫でしなやかな特性をもった雑草ほど手ごわいものはない。しかし、そんな厄介な特性を逆利用してしまうところに、ゴザ作りのおもしろさがある。一本一本に手をかけて丹念に織り込むことで、厄介者は、接客にかかせない道具へと生まれ変わるのである。



## 月に願いを

小松 久恵 (こまつ ひさえ)

大阪外国語大学非常勤講師

### 夫の健康と長寿を祈る日

二〇〇六年は、一〇月一〇日がカルワー・チヨウトの日だった。この日北インドでは、上層カーストを中心としたヒンドウーの妻たちが、夫の健康と長寿を願ってヴラタをおこなう。ヴラタとは沐浴や断食をすることでおこなう。ヴラタを想いながら一日を過ごすことをいう。女性たちは夜明けと同時に断食を始め、一日中水すら口にせず夜が来るのを待つ。夜になり月が昇ると、<sup>きよ</sup>越

しにその月を眺めて礼拝をおこない、水を満たしたカルワー(素焼きの器)を月に奉納して断食は終了する。断食後に女性が初めて口にする水は、月を映した水盆から夫が手ずから飲ませることになっている、と聞いたこともある。

妻が夫の健康と長寿を祈り、夫は妻の献身に感謝する。夫婦愛を象徴する美しい祝祭だと思っていたが、その思いを幻想だと笑い飛ばすかのような記事を目にした。伝統的な祝祭も風習も、時代とともに

に変わっていく。そんな記事が掲載されたのは、デリーの最大発行部数を誇るヒンディー紙においてである。

### 妻たちの不満

「カルワー・チヨウトが夫婦の争いの原因に」という記事によると、カルワー・チヨウトが、夫婦が互いへの愛情と信頼を保つていくための伝統的な祝祭であったのも今はむかし。今やすっかり近代文化に汚染されてしまっているそうだ。

たとえば、女性保護協会の会長ヴァンダナー・シャルマーは次のように指摘している。「最近、女性たちのなかに、夫婦不仲の原因としてカルワー・チヨウトを挙げている人がいます。ヴラタをおこなって丸一日ひもじい思いに耐えたのに、夫から何も贈り物がもらえなかったことを、妻たちは夫の愛情不足、あるいは自分を尊重していない、ととらえるようになったからです」。

このような争いはミドルクラスの家においてのみ見られるそうだ。裕福な家庭では、女性たちはこの日、高価なサリーや香水、アクセサリーなどをプレゼントしてもらうことができる。忙しくて何も買えなかった場合でも、夫は現金でその埋め合わせをする。けれどミドルクラスの家庭では常に金銭的な問題を抱えているため、夫たちの大半は妻にプレゼント

を買う余裕がない。しかも妻の方も、ちょっとした贈り物だけでは満足しなくなっているのだ。

この記事によると、夫の長寿を祈るといふ本来は無私の行為が、見返りを求めるためのパフォーマンスに変わっている。ヴラタが「神と自分との対話」ではなく、「夫を含んだ周囲へのアピール」の道具となっている。この状況を、記事を書いた記者のように「近代化の影響」とみなすことも可能である。また拝金主義、物質主義という観念から分析することも可能だろう。同時に、これまで何世紀にもわたってインド社会にドツカリと存在していた、滅私や献身といった「理想の妻像」に対する女性側からの反乱、と読むこともでき、わたしなどはいっそ小気味良さをおぼえたりもした。

### 苦勞を誇りに

当然ながらこういった風潮が全ての女性に当てはまるわけではない。

地域の小さな美容院で働くラージュニーは、結婚一年目だ。はじめてのカルワー・チヨウトについて訊ねると、「一日中何も食べちゃいけないのよ、水も飲めなくて大変なんだから」と顔をしかめてみせながらも、どこか誇らしげに話してくれた。四人の子どもをもつパールヴァティは、いわゆるダリト(被抑圧階層)の出自であ

る。「大切な日なのよ、この日のために綺麗にしなくちゃ」と四〇代の彼女が、まるで娘のようにしゃべっていたのが印象的だった。髪をきれいに染め、新しい化粧品を買って、彼女はいそいそと祝祭に備えていた。

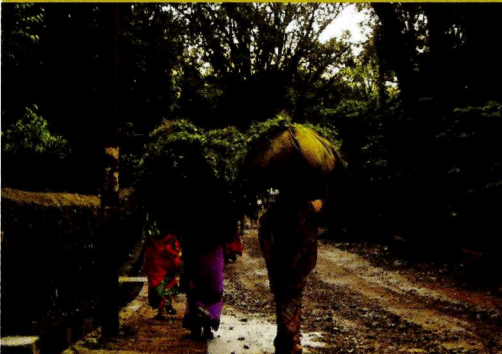
実際にわたしが見聞きしたこれらの例から、カルワー・チヨウトの本来の姿は今や、労働者階層の、あるいはダリトの女性たちのあいだにこそ見ることができただ、と論じることも可能だろう。そのことを、上層クラスの文化を下層クラスが模倣する「サンスクリット化」という概念にあてはめて、理解することもできる。けれどその概念だけで、ラージュニーやパールヴァティにとつての「カルワー・チヨウト」を語ることはできるだろうか。ラージュニーは断食にともなう苦勞を嘆いてみせながらも、その声と表情にあらわれていたのはヴラタをおこなうことに対する誇りだった。パールヴァティにとつてのカルワー・チヨウトは、辛い断食の日ではなく、夫婦の愛情を確認する晴れがましい日を意味しているのである。

今年のカルワー・チヨウトは一〇月二十九日。今もこの先も、カルワー・チヨウトの日が近くなるとわたしの胸によぎるのは、ものごとを分析的に理解するための議論や概念よりも、ラージュニーやパールヴァティの誇らしげな笑顔である。月に願いを。彼女らに、幸福を。

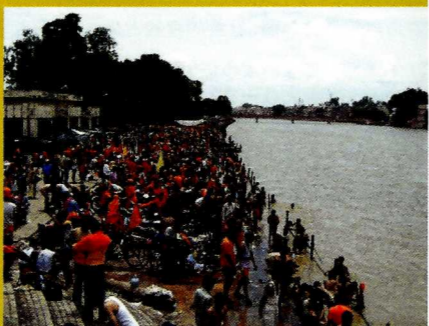
聖地にて夕方の礼拝。  
神へ祈りを捧げる女性



聖地での礼拝時間。  
階層によってはいつもと同じ労働の時間だ



ガンジス河の聖なる水を汲むために、  
8月、国中から信者が集まる



聖なる河へ捧げる  
花と灯明



# 開館30周年記念

## みんなく ウィークエンド・サロン 研究者と話そう

「研究者と話そう」では、8月も多彩な話題を提供します。

夏休みの博物館で、  
思わぬお話が聞ける  
かも。来館者のみな  
さんからの質問も  
お待ちしております。  
こんどのお休みには、  
どうぞ民博へ。



東アジア・日本の文化展示  
「おしらさま」

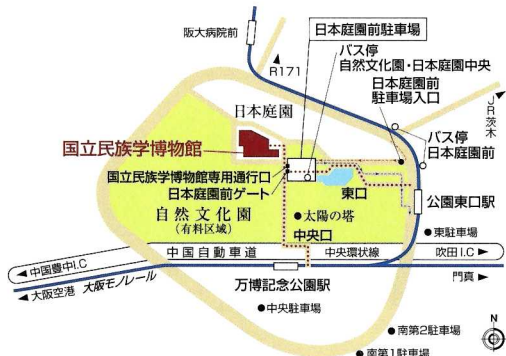
- 時間：14:30～15:30(予定)
- 参加費：無料(ただし、観覧券が必要)

\* 毎週土曜日は、小学生・中学生・高校生は無料で観覧できます。  
ただし、自然文化園を通行して来館される場合は、自然文化園の入園料が必要です。

### 編集後記

「くれる」という今の世の若者の実態にはそぐわないことばを切り口にしたことによって、執筆者の皆さんを悩ませてしまったかもしれない。しかし他のことば——例えば「背く」「歯向かう」「反抗」など——では、若者自身の心の葛藤、社会的権威と個人の関係、逸脱の仕方の時代性・地域性が見えてこないように思えた。

ジェームス・ティーンに象徴されるようなグレの美学が存在し得た社会と、「くれる」などという生易しい、ある意味でのんきなことばではあrawせない若者の逸脱行為が生まれる社会のギャップはどこからきたのか？この小さな特集では到底十分な答えは出ないかもしれないが、考えるきっかけになればと願っている。  
(山中由里子)



### 交通案内

- 大阪・千里万博記念公園内
- 大阪モノレールで「公園東口駅」・「万博記念公園駅」下車徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分(茨木方面から1時間1本程度、日本庭園前駐車場乗り入れのバスがあります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。
- 自家用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

実施日・話者・話題・場所

8月5日(日)

陳 天璽 (先端人類科学研究部准教授)

無国籍ってなに？

於：展示場内休憩所

8月11日(土)・12日(日)

近藤 雅樹 (民族文化研究部教授)

みんなくの怪談

於：東アジア展示・第7セミナー室

8月13日(月)

樫永 真佐夫 (民族社会研究部助教)

格闘技する身体 —東南アジアから

於：東南アジア展示

8月19日(日)

佐々木 史郎 (研究戦略センター教授)

アイヌと蝦夷錦

於：アイヌの文化展示

8月25日(土)

山本 泰則 (文化資源研究センター准教授)

展示プレート・ウォッチング

於：オセアニア展示～日本の文化展示

※以後の予定は、ホームページ等でお知らせします。

月刊



次号予告/9月号特集  
オセアニア

2007年8月号

第31巻第8号通巻第359号  
2007年8月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1  
電話06-6876-2151

発行人 朝倉敬夫

編集委員 池谷和信(編集長) 樫永真佐夫  
久保正敏 庄司博史 山中由里子

協力 財団法人 千里文化財団

制作 株式会社博報堂

製版・印刷 アサヒ精版印刷株式会社

●本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ  
●本誌掲載記事の無断転載を禁じます